明暗評釈　五

第二章（下）

鳥井正晴

初出

大正五年（一九一六年）五月二十七日・「東京朝日新聞」。
大正五年（一九一六年）五月二十六日・「大阪朝日新聞」。

評釈

⑥【彼はついぞ今迄自分の行動に就いて他から牽制を受けた覚がなかつた。為る事はみんな自分の力で為、言ふ事は悉く自分の力で言つたに相違なかつた。】

㈠、①、第六十五章に、〈冒頭から結末に至る迄、彼女は何時でも彼女の主人公であつた。又責任者であつた。自分の料簡を余所にして、他人の考へなどを頼りたがつた覚はいまだ嘗てなかつた。〉と、ある。

②、第七十二章に、〈自分の眼で自分の夫を択ぶ事が出来たからよ。岡目八目でお嫁に行かなかつたからよ。〉と、ある。

津田とお延は、ともに近代的自意識家であり、拮抗している。

⑦【何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう。】

(一)、①、第百三十九章に、次の如くある。

△「貴方は何故清子さんと結婚なさらなかつたんです」

問は不意に来た。津田は俄かに息塞つた。黙つてゐる彼を見た上で夫人は言葉を改めた。

「ぢや質問を易へませう。——清子さんは何故貴方と結婚なさらなかつたんです」

今度は津田が響の声に応ずる如くに答へた。

「何故だか些とも解らないんです。たゞ不思議なんです。いくら考へても何にも出て来ないんです」

「突然関さんへ行つちまつたのね」

「えゝ、突然。本当を云ふと、突然なんてものは疾の昔に通り越してゐましたね。あつと云つて後を向いたら、もう結婚してゐたんです」▽

②、第百六十章に、次の如くある。

△小林は又すぐ其機に付け込んだ。

「一体あの顚末は何うしたのかね。僕は詳しい事を聴かなかつたし、君も話さなかつた、のぢやない、僕が忘れちまつたのか。そりや何うでも構はないが、ありや向ふで逃げたのかね、或は君の方で逃げたのかね」

「それこそ何うでも構はないぢやないか」

「うん僕としては構はないのが当然だ。又実際構つちやゐない。が、君としてはさうは行くまい。君は大構ひだらう」

「そりや当り前さ」▽

③、第百七十二章に、△彼は別れて以来一年近く経つ今日迄、いまだ此女の記憶を失くした覚がなかつた。▽と、ある。

④、第百八十三章に、〈突如として彼女が関と結婚したのは、身を翻がへす燕のやうに早かつた　（中略）　「あの緩い人は何故飛行機へ乗つた。彼は何故宙返りを打つた」〉と、ある。

津田にとって、清子（の行動）は、解けない謎として、現在も残り続けている。折に触れ、津田の意識の深層から、この命題が迫り上がってくる。津田が、解けない宿題を抱え込んでいるところから、小説『明暗』は、始まる。

(二)、①、谷崎潤一郎の、〈芸術一家言〉（『改造』、大正九年（一九二〇年）四月～十月）に、有名な、次の否定的感想がある。

〈作者は第二回の末節に於いて予め物語の伏線を置き、津田をして下のやうなことを独語させてゐる。――

「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう。　（中略）　何だか解らない」

彼は電車を降りて考へながら宅の方へ歩いて行つた。

此れが津田の煩悶であつて、事件は此れを枢軸にして廻転し、展開して行くかのやうに（圏点谷崎）見える。が、作者は此の伏線の種を容易に明かさないで、ところ〴〵に思はせ振りな第二第三の伏線を匂はせながら、津田にいろ〳〵の道草を食はせて居る。若しあの物語の組み立ての中に何等か技巧らしいものがあるとすれば、此れ等の伏線に依つて読者の興味を最後まで繋いで行かうとする点にあるのだが、その手際は決して上手なものとは云へない。読者は第一の伏線に依つて、津田が現在の妻に満足して居ない事と、彼には嘗て恋人があつた事とを暗示される。さうして其処から何等かの葛藤が生ずるのであらうと予期する。ところが津田はそれとは関係のない入院の手続きだの、金の工面だのにくよくよ（圏点谷崎）して、吉川夫人を訪問したり、妻の延子と相談したりしてぐづ〳〵して居る。（P.47）　（中略）

最も閑人らしくない小林からして既に斯くの如くであるから、忙しい中に一々彼の相手になつて居る津田と云ふ人

間の呑気さ加減は云ふまでもない。一体漱石氏には何となく思はせ振りな貴族趣味があつて、「明暗」中の人物も小林を除く外は大概お上品な、愚にも付かない事に意地を張つたり、知恵を弄したりする、煮え切らない歯切れの悪い人たちばかりである。私に云はせればあの物語中の出来事は、悉くヒマな人間の余計なオセツカヒと馬鹿々々しい遠慮の為めに葛藤が起つてゐるのである。(P.54)〉(引用は、『谷崎潤一郎全集』20巻、中央公論社、昭和四十三年(一九六八年)六月に、拠る)

②、平岡敏夫の、〈「明暗」論――方法としての「過去」への旅――〉(『漱石序説』、塙書房、昭和五十一年(一九七六年)十月)に、次の評がある。

〈谷崎潤一郎の「明暗」論は否定の極北であるが、「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう。」という、最初にはられた伏線を当然のこととして受けとめ、その展開の〝ルーズ〟ぶりに立腹したところに批判のモチーフはあらわれている。(P.396)〉

③、菅野昭正の、〈「明暗」考〉(『国文学』31巻3号、学燈社、昭和六十一年(一九八六年)三月)に、次の見解がある。

〈津田の意識の暗点を照らした灯が消えてしまうこと、いいかえれば「此の伏線の種を容易に明かさない」ことを論難した谷崎潤一郎の批判はよく知られているが、そして不評判な言いがかりとみなされる場合も少なくないようだが、これはかならずしも暴言とばかりは言いきれまい。小説は期待の芸術であり、前途にたいする読者の期待がたえずしだいに高められてゆくことに、作者は最大のエネルギーをそそがなければならないが、『明暗』の読者としての谷崎潤一郎は、あの女がなぜ津田のもとを離れていったかという「伏線」からたぐりだされる物語の前途に、まず期待を集中しようとしたのだと思われる。

こういう読みかたは、「筋の面白さを除外するのは、小説と云ふ形式が持つ特権を捨てゝしまふこと」(「饒舌録」)

と考えていた小説家に、いかにもふさわしいものであろう。現在の妻であるお延に満足していない津田のなかに、あの女を思いだすことによって生じる「何等かの葛藤」を軸にして廻転しながら、『明暗』が「筋の面白さ」、物語の愉しみを作りだしてゆきそうな予感を感じるのは、谷崎潤一郎だけとは限るまい。冒頭の何章かのあいだ、漱石の筆はたしかにそちらの方向を指しているように見えるし、その方向が見失われてしまうわけではない。

見失われてしまうわけではないけれども、そして津田の意識の暗点という礎石は動かしようがないけれども、小説は谷崎的な期待の方向にまっすぐ進んではゆかない。（P.76）〉

④、三好行雄の、〈構造としての同心円〉（『「鑑賞日本現代文学」5夏目漱石』、角川書店、昭和五十九年（一九八四年）三月）に、次の見解がある。

〈『明暗』を書く漱石は決してさきを急がない。　（中略）　〈暴風雨にならうとして、なり損ねた波瀾〉（百五十）のつみかさねが事態を微妙に変えながら、結果として直線的にではなく、円を描きながら徐々に前へすすむという形で、プロットの展開をみちびく。小説は同心円風な構造をもって、核心に迫ってゆくのである。核心にあるのが〈彼の女〉、日常的な関係の背後にひそむ謎であるのはいうまでもない。〈一種の惰力を以てズルズルベッタリに書き流された極めてダラシのない作品〉という谷崎潤一郎の批評（「芸術一家言」）は有名だが、無類のロマンシエの眼に、『明暗』の構造がいささか間延びして見えたとしても、決してふしぎではない。明晰な批評家、現実の果敢な析断家だった漱石は、ここには不在である。（P.261）〉

⑧【電車】

㈠、第二章、津田の思弁が、電車の中で、展開される。

〈彼は思はず唇を固く結んで、恰も自尊心を傷けられた人のやうな眼を彼の周囲に向けた。けれども彼の心のうち

に何事が起りつゝあるかを丸で知らない車中の乗客は、彼の眼遣に対して少しの注意も払はなかつた。〉

各自、自己の思弁を展開させるのに打って付けの場で、「車中」はあるだろう。漱石文学における、文明の象徴・近代の隠喩である「電車」が、効果的に使われている。

㈡、第七十七章には、同様、車中のお延が、描かれる。

〈彼女は急いで其所へ来た電車に乗つた。（中略）二人が辛うじて別れの挨拶を交換するや否や、一種の音と動揺がすぐ彼女を支配し始めた。

車内のお延は別に纏まつた事を考へなかつた。入れ替り立ち替り彼女の眼の前に浮ぶ、昨日からの関係者の顔や姿は、自分の乗つてゐる電車のやうに早く廻転する丈であつた。然し彼女はさうした目眩しい影像を一貫してゐる或物を心のうちに認めた。若くは其或物が根調で、さうした断片的な影像が眼の前に飛び廻るのだとも云へた。彼女は其或物を拈定しなければならなかつた。然し彼女の努力は容易に成効をもつて酬ひられなかつた。団子を認めた彼女は、遂に個々を貫いてゐる串を見定める事の出来ないうちに電車を下りてしまつた。〉

⑨【彼は釣革にぶら下りながら只自分の事ばかり考へた。

彼は又考へつゞけた。

彼はそれをぴたりと自分の身の上に当て嵌めて考へた。

彼は電車を降りて考へながら宅の方へ歩いて行つた。】

津田は考え続けている。津田の、「考える人」としての存在（ザイン）が、顕著である。

㈠、第百三十九章、吉川夫人によって、津田の、心の深層が、掘り起される。

△「随分気楽ね、貴方も。清子さんの方が平気だつたから、貴方があつと云はせられたんぢやありませんか」

「或は左右かも知れません」

「そんなら其時のあつの始末は何う付ける気なの」

「別に付けようがないんです」

「付けようがないけれども、実は付けたいんでせう」

「えゝ。だから色々考へたんです」

「考へて解つたの」

「解らないんです。考へれば考へる程解らなくなる丈なんです」

「それだから考へるのはもう已めちまつたの」

「いゝえ矢張り已められないんです」

「ぢや今でもまだ考へてるのね」

「さうです」▽

小説は、同心円を描きながら、第百三十九章、再び、第二章の、津田の命題に、円環する。

㈡、①、第十一章に、次の如くある。

△彼は、談話の途中でよく拘泥つた。さうしてもし事情が許すならば、何処迄も話の根を堀ぢつて、相手の本意を突き留めやうとした。遠慮のために其所迄行けない時は、黙つて相手の顔色丈を注視した。其時の彼の眼には必然の結果として何時でも軽い疑ひの雲がかゝつた。それが臆病にも見えた。注意深くも見えた。又は自衛的に慢ぶる神経

の光を放つかの如くにも見えた。最後に、「思慮に充ちた不安」とでも形容して然るべき一種の匂も帯びてゐた。〉

②、第百二十四章に、お延も、〈昨日の戦争に勝つた得意の反動からくる一種の極り悪さであつた。何んな敵を打たれるかも知れないといふ微かな恐怖であつた。此場を何う切り抜けたら可いか知らといふ思慮の悩乱でもあつた。〉と、ある。

③、第百四十四章に、お延は、〈何故だか病院へ行くに堪へないやうな気がした。此様子では行つた所で、役に立たないといふ思慮が不意に彼女に働らき掛けた。〉と、ある。

④、第百四十七章に、お延は、〈前後の関係から、思量分別の許す限り、全身を挙げて其所へ拘泥らなければならなかつた。それが彼女の自然であつた。〉と、ある。

㈢、①、第百四十一章には、次の如くある。

〈男らしくないと評されても大した苦痛を感じない津田は答へた。

「左右かも知れませんけれども、少し考へて見ないと……」

「其考へる癖が貴方の人格に祟つて来るんです」〉

②、第百七十二章に、次の如くある。

〈御者は先刻から時間の遅くなるのを恐れる如く、止せば可いと思ふのに、濫りなる鞭を鳴らして、しきりに痩馬の尻を打つた。失はれた女の影を追ふ彼の心、其心を無遠慮に翻訳すれば、取りも直さず、此痩馬ではないか。では、彼の眼前に鼻から息を吹いてゐる憐れな動物が、彼自身で、それに手荒な鞭を加へるものは誰なのだらう。吉川夫人？　いや、さう一概に断言する訳には行かなかつた。では矢つ張彼自身？　此点で精確な解決を付ける事を好まなかつた津田は、問題を其所で投げながら、依然としてそれより先を考へずにはゐられなかつた。〉

③、第百七十七章に、次の如くある。

＜彼は此宵の自分を顧りみて、殆んど夢中歩行者のやうな気がした。彼の行為は、目的もなく家中彷徨き廻つたと一般であつた。ことに階子段の下で、静中に渦を廻転させる水を見たり、突然姿見に映る気味の悪い自分の顔に出会つたりした時は、事後一時間と経たない近距離から判断して見ても、慥かに常軌を逸した心理作用の支配を受けてゐた。　（中略）　何故あんな心持になつたものだらうかと、たゞ其原因を考へる丈でも、説明は出来なかつた。＞

④、そして、現に書かれてある、『明暗』の最後（第百八十八章）も、＜清子は斯う云つて微笑した。津田は其微笑の意味を一人で説明しようと試みながら自分の室に帰つた。＞で、中絶する。

小説は、「考える人」・津田の存在（ザイン）が、描かれて終る。「考える自我」が、小説『明暗』の主題として、常にある。

㈣、加藤二郎の、＜『明暗』論――津田と清子――＞（『文学』56巻4号、岩波書店、昭和六十三年（一九八八年）四月）に、次の見解がある。

＜清子は津田のもとを「突然」に去った、或いは「突然なんてものは疾の昔に通り越して、」「あつと云つて後を向いたら、もう（関と）結婚してゐた」（百三十九、（　）…論者）という形のものであった。津田は「今日迄其意味が解らずに」（百三十四）、「たゞ不思議」なのであり、「何故だか些とも解ら」ず、「いくら考へても何にも出て来」ず、「考へれば考へる程解らなくなる丈」（百三十九）とされている。「思慮に充ちた不安」（十一）と括弧付きで端的に示唆されている津田の人間としての在り方である。『明暗』の津田に関してはこの「思慮に充ちた不安」、即ち上の引用に言う「考へる」人としての彼の在り方が基本的なものとしてある。そのことは作品の冒頭部分の例示だけでも、「津田は自分の都合を善く考へてから……」（一）、「彼は……只自分の事ばかり考へた。」（二）、「彼は又考へつゞけた。」（同前）、「彼は……考へながら宅の方へ歩いて行つた。」（同前）等と頻出しており、そこに漱石の意図は十分に明示的である。

そしてこうした津田の「考へ」「思慮」の焦点に位置している最深のもの、それが清子の事柄であることは言を俟たない。(P.100)〉

*

小説の後半（第百六十七章以降）、津田は、旅に出る。

㈠、越智治雄の、〈明暗のかなた〉（『漱石私論』所収、角川書店、昭和四十六年（一九七一年）六月）に、次の見解がある。

〈津田は旅に出る。それは『行人』の一郎の場合と同様作為された旅であって、吉川夫人の目的がどのように卑俗なものであったとしても、やはり認識の旅になるだろう。(P364)〉

㈡、佐藤泰正の、〈『明暗』――最後の漱石――〉（『夏目漱石論』、筑摩書房、昭和六十一年（一九八六年）十一月）に、次の見解がある。

〈すでに作者は冒頭からこの主人公に重い問いをになわせて歩ませる。終末の未知への〈旅〉はまた必然であろう。旅の途上、「暗い不可思議な力」は彼を引きずり、場面は転調しつつ、深い象徴性の翳を帯びる。(P.405)〉

㈢、三好行雄の、〈非日常への旅〉（『「鑑賞日本現代文学」5夏目漱石』、角川書店、昭和五十九年（一九八四年）三月）に、次の見解がある。

〈津田は旅に出る。百六十八節以降、『明暗』の世界は明らかに形相を変化させる。変化は方法の変質をともない、同心円の堂々めぐりから直線としての展開へ、小説の速度はようやくはやまった。

〈何か作者のこころ急ぐ息遣いが、かすかにではあるが聞えてくる〉（桶谷秀昭）のである。

列車を乗りかえ、軽便から馬車に乗り継いで宿にむかう津田の旅はまさしく文明から非文明への旅であった。関係性の地平に張りつけられた日常の時間から、非日常の時空への旅であり、明暗のない世界から明暗双々の世界へむかう旅でもあった。（P.268）　（中略）

〈突然清子に脊中を向けられた其刹那から、自分はもう既にこの夢のやうなものに祟られてゐるのだ〉と津田は考える。清子の変貌は、津田の宿命の発端であった。というより、もっと正確にいえば、津田をいやおうなく、宿命の自覚にむかってうながす因果の起点であった。〈精神界も全く同じ事だ。何時どう変るか分らない。さうして其変る所を己は見たのだ〉という、あの心のなかの叫びはいまも消えない。しかし、〈其変る所を己は見た〉と津田はいうのだか、吉川夫人に〈清子さんは何故貴方と結婚なさらなかつたんです〉と問いつめられて、〈何故だか些とも解らないんです。たゞ不思議なんです。いくら考へても何にも出て来ないんです〉（百三十九）と答える津田であってみれば、実はなにひとつ見てはいないというべきである。現象の背後にひそむ〈暗い不可思議な力〉(二)の根源をこそ、津田は見なければならない。人間にとって、他者はついに了解不能な闇のなかに沈む。にもかかわらず、津田は了解不可能な他者を理解するための旅に出る。（P.269）〉

＊　＊

読者を魅了して止まない、小説の導入部で、『明暗』の、第一章、第二章はある。

(一)、石原千秋の、〈『明暗』は終わるか〉（『海燕』10巻8号、福武書店、平成三年（一九九一年）八月）に、次の見解がある。

〈確かに、『明暗』は結末への期待をそそってやまない。それは、この小説が未完に終わったからばかりではないだ

ろう。『明暗』の言葉が、結末への期待を促し続けている。「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう。」「此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう。」――この、冒頭近くにある津田由雄の二つの問いをめぐって劇が展開しているからである。そして、津田の自覚としては、第一の問いの答えを求めてわざわざ清子のいる温泉場に行くのだから。

(P.210)　(中略)

しかも、これらの小説の結末には共通点がある。『三四郎』も『それから』も、「たゞ口の内で迷羊、迷羊と繰返した」、あるいは、「代助は自分の頭が焼け尽きる迄電車に乗つて行かうと決心した」という持続のイメージで締め括られているし、テクストには確かに〈終わり〉があるのに物語はいっこうに結末を迎えていなかったり(後期三部作)、物語は終わっているのにテクストの〈終わり〉が〈終わり〉でないことを告げていたり(『門』『道草』)するのである。こうしたテクストの結末における持続は、まさに「家族語」(D・クーパー『家族の死』)による結末をこそ回避し続け、空白にし続けていたのではないだろうか。持続する結末が、テクストの空白に新たな言葉の運動を促すのだ。(P.211)〉

(ニ)、①、三好行雄の、〈『明暗』の構造〉(『講座夏目漱石』3巻、有斐閣、昭和五十六年(一九八一年)十一月)に、次の見解がある。

〈最初の一章から読者を魅了して止まぬ――小説の導入部に、読者にはまだ未知の終末から吹きつけてくる風のように、傑作の予感が濃くただよう長篇小説なのである。にもかかわらず、『明暗』は作者の死によって中絶した。(P.275)

(中略)

『明暗』は現に書かれているかぎりの形で、作品と呼ぶにふさわしい実質をそなえている。にもかかわらず、導入部に吹いていたあの風の源泉を読者は確かめることができない。この矛盾は、『明暗』を論じようとする試みにとっての大きなアポリアであると同時に、収束が書かれていないから、それを予想する自由をひとに残す。まして、漱石は

伏線を張る（圏点三好）という、推理小説にもっとも有効な手法を多用した作家である。書かれなかった破局を推理する材料にもこと欠かないのである。（P.276）〉

②、三好行雄の、〈明暗〉（吉田精一編『夏目漱石必携』、学燈社、昭和四十二年（一九六七年）四月）に、次の見解がある。

〈「明暗」は漱石の死によって中絶した。これが多くの明暗論にとって、大きなアポリアのひとつになっているようである。作品はその完結とともに読者にはじめて手渡される。未完の小説は書かれた限りの世界がいかに牢固であろうとも、常に不安定で流動的なイメージしか結ばない。だとしたら、明暗論は論じることの不可能な場所、いわば不在の対象から出発しなければならぬのである。（P.156）〉

附記　一、『明暗』本文中、○印は鳥井。

一、『明暗』本文の引用は、岩波書店刊『「漱石全集」第七巻・明暗』（昭和四十一年六月二十三日第一刷発行　昭和五十年六月九日第二刷発行）に拠った。但し、旧字は、新字に改めた。

（平成七年九月二十八日）